

ウラギンシジミの越冬

近藤伸一

ウラギンシジミはネパール付近から中国大陸、インド南部、インドシナ、台湾など広く東アジアの照葉樹林帯を主な生息地とし、福島県付近が生息地の北限となっている。冬季は常緑広葉樹の葉の裏で成虫越冬することが知られている。

昨年暮れに、自宅(神戸市西区)の生垣でウラギンシジミが越冬しているのを、生垣を剪定していた家人が見つけた。このウラギンシジミはアラカシの葉の茂みの奥で越冬していたのだが、外側の葉を刈り取られたために、まともに風雨にさらされる状態になっていた。翅を摘んで軽く引っ張ったが、葉から離れなかったようで、かなりしっかりとしがみついていたようである。

越冬の様子は、地上1.5mの高さにあるアラカシの葉の裏に、頭部を北東方向に向けて、触角を閉じた翅の間に挟みこみ、前脚は折りたたんで4本の脚(中、後脚)でぶら下がるように張り付いていた。

写真を何回か撮って気付いたのだが、アラカシの葉は風で常時小刻みに揺れており、シャッターチャンスは意外と少ない。ということは広い面積の翅が常に風圧を受けているわけで、大きな翅を小さな4本の脚で長期間支えられているものと感心させられる。その後特に十分な観察せず出勤時にチラリと見る程度であった。

今年の1月末から2月2日にかけてこの冬最大の寒波に襲われ県北部は大雪となった。神戸でも気温は-2.3℃まで下がり冷たい風が吹き荒れたがウラギンシジミは同じ体勢で耐えた。

2月3日は寒波が去り暖かい日となった。日光が射し始めた午前10時過ぎ、ウラギンシジミが盛んに口吻を動かしているのに気づいた。これまでずっと折りたたんでいた前脚を伸ばして6本の脚で体を支え、口吻の先は葉面(葉裏)をなめるように前後左右移動させ、遂には口吻先は葉表までに

達し、葉表の端をまさぐり、また葉裏に戻り……という行動を約1時間繰り返した(当日の10時の気温は直射日光下で12℃)。

翌日(4日)も暖かい日であったが、ウラギンシジミは前脚を折りたたんだいつもの4本脚で、口吻を伸ばすこともなく、その後11日までは朝晩2回(8時前と23時前後)の観察だったが4本脚の普段の越冬体勢であった。

2月12日、8時に見た時は普段の4本脚だったのに13時に見ると右前脚を伸ばして葉を掴み5本脚となっていたので観察を始めた。30分後も同じ体勢、14時には右前脚は葉から離れていたが伸びた状態で、その後15時30分まで同じ体勢であった。

17時30分には伸びていた右前脚が90度に折り曲げられ、21時でも同じ状態であった(天候は曇り無風、気温は13時:12℃、14~16時:10℃、21時:6℃)。

翌13日の7時には両前脚をしっかりと折りたたみ、普段の4本脚状態に戻っているのを確認したが、14日の朝姿が無くなっていた。

ウラギンシジミが消えた2月13~14日は昼間汗ばむほどの季節外れの暖かさで、13日には夜(22時)でも12℃あった、その後しばらく温暖な日が続いたが、2月17日には寒さが戻り、当地でこの冬初めての積雪を見た。ウラギンシジミは自発的に葉から離れたのか、力尽きて吹き飛ばされたのかは不明だが、どこか別の場所で無事越冬したものと思いたい。

(KONDO SHINICHI 神戸市西区岩岡町岩岡619-57)

イシガケチョウの採集報告

山口福男

編集子の要望に応じ私の採集記録を報告する。

10・12・1989 1♀ 神戸市中央区諏訪山公園

このことについては本誌第23巻第1号25ページに報告した。採集した日は穏やかな晴天の10時頃